№5	提　案　名：住民の要望調査及びその実行	
	提案団体名：宇都宮大学　夢を叶えて宇大生	
	所　　属：宇都宮大学　地域デザイン科学部　コミュニティデザイン学科	
	代　表　者：福田桃子	指導教員：高橋俊守　三田妃路佳
メンバー	福田桃子　篠原葵　山崎千歳　小筆響　柿沼伶那　栗田悠来	

○　提案の要旨

課題解決や何かしらの要望を求める地域あるいは住民と、ボランティア支援を行いたいと思っている人の仲介となるものを作成する。その方法として二者のニーズを合致でき、かつ参加の敷居が低いプラットフォーム作成を提案する。

前段階として栃木県内複数地域でアンケート調査、調査結果をもとにイベントを行い、それらの経験から具体的に実現可能性のある提案を考えた。

１．提案の背景・目的

メンバーの１人が「地域の人たちを誘って気軽なサッカーをしたい」という要望を持っていた。そこで実行することを考えたがまず誰に相談すればいいのか、自分で人を集めたら知り合いばかりになってしまうのではないか等の問題点が多く存在することに気が付いた。近年では、少子高齢化や過疎化が進行していることはもちろん、地域独自で行われている行事等の縮小が相次いでいる。加えて昔は存在した「助けてあげる・助けてもらう」という労働力の交換が、現在は貨幣を対価として外部に依頼するという形に変化した。それに応じて地域の人同士の関わりは希薄になっている。そのため『「地域の人と一緒に何かやりたい」と思っていても、実際に行動することは難しいのではないか』と考えた私たちは、地域住民が地域でやりたいことを手助けする仲介役となれるような企画を考案した。また、私たちがこういった活動を行うことで、地域住民が自分の暮らす地域について考えたり、地域への愛着が芽生えたりすると期待できる。こういった理由により、私たちは住民の地域への要望を調査し、住民自身の地域活動をサポートするという活動を実行する。

２．提案の目標・課題「まちに広がる共創の輪～新たな価値の創造を目指して～」との関連

本提案は地域共生社会・地域経済循環社会の実現に役立つことが期待される。まず、アンケートを通して「地域の人とやりたいこと、地域に期待するもの」を考えるきっかけを作る。そしてそれがイベントという形になれば、新しい交流の創出・絆を深める契機となるだろう。また、イベントを地域内の店や建物で行うことで地域内の経済活性化にも繋がると考えられる。地域の課題を他人任せにせず自分事としてとらえることを促し、地域は自分たちの手で共に創り上げていくものだということを知ってもらうことができるはずだ。

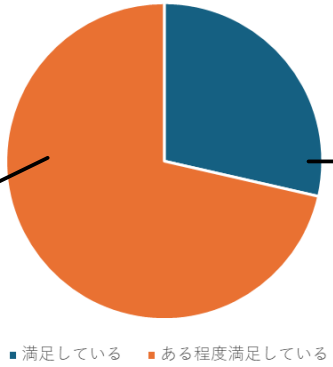
３．現状分析

3.1　要望調査のためのアンケート

⑴　日光市

日光市今市本町にある「バンマリー」というレストランにアンケートを設置した。「日光市に満足しているか、その理由はなにか。」という質問に対する回答を図１、「日光市でしたい地域ぐるみの活動はなんですか。」という質問に対する回答を表１に示す。

５票
・車社会なので、行動範囲を制限される方が多いのがもったいないと思います。
・遊べるような充分な商業施設はない（買い物がしにくい）本屋が不十分



２票
・地域における人間関係について
・世界遺産がある街に住んでいることを誇らしく思っています。
・水がおいしい
・町を歩いても知り合いが多い

図 1　日光における満足度アンケート結果

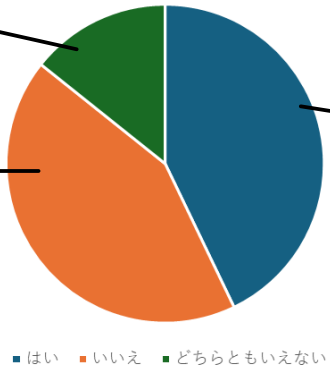
表 1　日光における要望アンケート結果

二社一寺だけではない歴史的建造物（日光駅や旧日光市役所など）を知る機会を市民、親子でもてたら嬉しいです。
しゅみに関する座談会
大人も学べるような環境があれば、毎日が楽しくなるような気がします。大人の「やってみたい」を刺激するような場所ができれば楽しそうです。
お正月行事＜凧揚げ大会＞
年齢に関係なく動けるスポーツ（軽スポーツ）若い世代の人と高齢の方との交流会
昔の日光市やいまいちの様子の映像や写真とともに話を聞きたい

⑵　芳賀町

芳賀町祖母井にある「道の駅はが」にアンケートを設置した。「芳賀町に満足しているか、その理由はなにか。」という質問に対する回答を図２、「芳賀町でしたい地域ぐるみの活動はなんですか。」という質問に対する回答を表２に示す。

１票
・引っ越して間もないから
３票
・子供たちが遊べる場所が少ない。
・市内と比べてお店が少ない。
・家を建てられる土地が少なく、若い人が町外に出てしまうことが多い。



３票
・今、現在不自由に感じていないので。
・高望みをしたらきりがないので。

図 2　芳賀町における満足度アンケート結果

表 2　芳賀町における要望アンケート結果

子供たちも参加できる事
地域の歴史、文化を繙く。自然に触れる。地域の農産物を食す。地域を歩いてみる。
地域の歴史、文化を繙く。自然に触れる。地域の農産物を食す。地域を歩いてみる。

⑶　宇都宮市

宇都宮市中今泉にある「東生涯学習センター」にアンケートを設置した。「宇都宮市に満足しているか、その理由はなにか。」という質問に対する回答を図●、「宇都宮でしたい地域ぐるみの活動はなんですか。」という質問に対する回答を表●に示す。

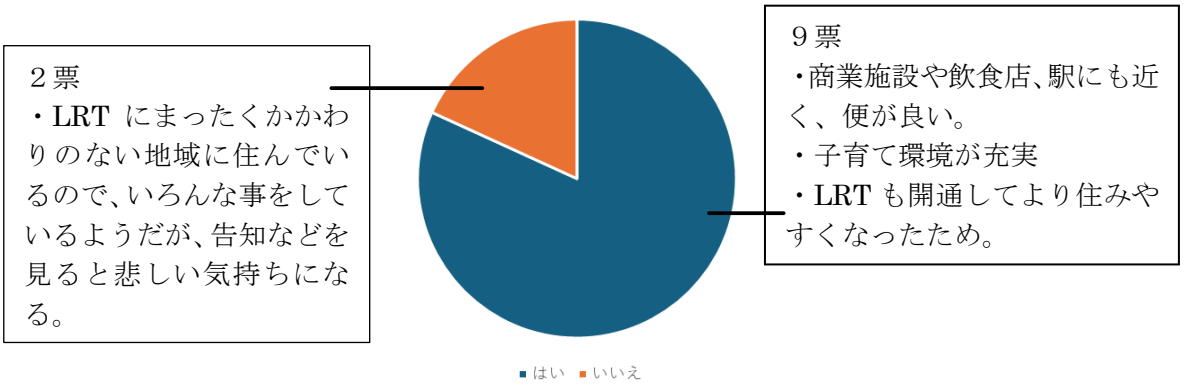


図 3　宇都宮市における満足度アンケート結果

表 3　宇都宮市における要望アンケート結果

動物愛護活動（保護をした動物のお世話を子供たちがボランティアでお世話をすることができるシステム）
子ども会や自治会で協力しあってイベントなどを行う
行いたい気持ちはあるがなにをすればいいかわからない
心のケア
子どもの楽しめる活動
子どもに関わる事

3.2　要望に基づくイベントの実施

今回はバンマリーでのアンケートで回答のあった「趣味に関する座談会をしたい」という要望を取り上げて、イベントの実施をした。場所はバンマリーの一室で、参加者は宇都宮大学生６名、今市在住の高校生２名、本要望を書いた中学生１名、その友人１名の計１０名である。この高校生のうち１人は地元における学生同士のつながりが希薄であることを問題として捉えており、何か手助けをする活動をしたいと考えていた。それを知っていた本グループのメンバーが呼びかけをし、イベントの開催に至った。イベントの様子を以下の図●に示す。

図 4　イベントの様子

3.3　アンケート、イベント実施後の考察

前述のアンケート調査から住民が何かしらの要望を地域に対して持っていることが分かり、それ

を支持したいと考える人も存在する。それらを結びつけるハブとしての役割を今回はメンバーが担った。しかし今回、特定の問題に対して「手伝いたい」「ボランティア的な活動をしたい」と考えている人を見つけ出すことができたのは非常に偶発的な出来事である。今後同様にアンケート結果に基づくイベントの開催をしようとしても、手助けをしてくれる人を探すのは困難であると感じた。

４，施策事業の提案

考察より、地域内に要望があるにもかかわらず、ボランティアの人員を集める手法がない事が課題として存在することが分かった。この課題を解決するため、私たちは要望を持つ地域の人と何か人の手助けをしたいと思っている人との仲介となるプラットフォームの作成を提案する。

プラットフォームはウェブサイトを想定している。考えているサイトの特徴としては 1.ホームページを作成、パスワードや ID を入れることでそのページに入れるように設定する、2.利用者は本名や電話番号等の個人情報を記入する必要はなく、また要望を投稿したい場合は、書いてほしい内容が指定されたフォームに記入して投稿してもらう形にする（充分に詳細な情報を書かないと誤解が発生する恐れがあるため）、3.両者のニーズを一致させるために投稿やプロフィールにタグ付け機能とキーワード検索機能を付けるなどがある。サイトの問題点・リスクとしては、匿名だと責任性が薄れてしまい、不確実要素が大きくなる（参加するふりをして実際には行かない、嘘の要望を投稿する、等のいわゆる荒らし行為が発生する可能性）という点である。また、地域の人たちが気軽には入れて要望や支援参加をできるように敷居の低さを大切にしたい。

しかしある程度のルールを決めて秩序を保つ必要がある。一部の悪意ある人のせいでその他大勢が不利益を被るようなシステムになってはいけないが、経験のない私たち学生ではその点を充分に想定することができないだろう。そこで、サイト作成に関しては「とちぎデジタルハブ」に協力を依頼するという案も考えている。「とちぎデジタルハブ」は地域の課題を共有し、解決方法について話合い時には企業とマッチングして課題解決を目指すウェブサイトだ。私たちの提案に近い内容を実施しているが、協力を依頼したいのはあくまで私たち独自のプラットフォーム作成に関してであり、既にある「とちぎデジタルハブ」の仕組みを利用して地域の課題解決を目指す、というものではない。私たちは企業と繋げて課題を解決するのではなく、課題解決以外にも地域でやってみたいこと、あったらうれしい事などふと思いついた小さな要望も拾っていけるようなプラットフォームを目標としている。

現在様々な方面で分断が発生し、「かつては普通に存在していたが現在失われつつある緩やかなコミュニティをよみがえらせたい」「ローカルな人同士のつながりを感じられるようなものを作りたい」という思いが根本にあるという点を重視しており、「とちぎデジタルハブ」よりもさらに小さい地域の規模感でイメージしている。

１つの地域、小さな単位でのつながりやコミュニティは現在目指される地域共生社会にとって必要不可欠なものである。現状のままでは掬いきれない要望が存在しており、またサポートをしたいと考えていても方法が分からず行動に移せない人もいることが分かっている。本提案は要望・課題の解決を通じて、近い距離間で人と関わる機会を創出することが可能で、宇都宮市が考えているスーパースマートシティの実現に寄与することができると考える。実施したイベントはあくまで試験的なものであり、ボランティア協力者を集めるシステムを作成することはできていない。しかし行政やノウハウのある企業と提携することが可能ならば、プラットフォームを完成させることも実現できるだろう。

【参考文献】

Digital Hub とちぎデジタルハブ，（https://www.tochigi-digitalhub.jp/），（2024 年 11 月 20 日閲覧）